

# いのちと地域を守る

## 迅速

従業員は大きな声で「石巻中央公民館までご案内します」と告げた。8月27日午後7時15分ごろ、石巻市中央



「むすび塾」で「石巻芽生会」などが実施した夜の避難訓練は、飲食店で客が  
いる状態での地震発生を想定して行った。同会による夜の避難訓練は2014年  
2月に続いて2回目、従業員による客の避難誘導の在り方や客や従業員自身の  
命を守る行動などについて検証した。

訓練会場となった日本料理店「瀧川」は、2011年3月の東日本大震災で約4階の津波に襲われ全壊。約2年後に同じ場所での完全営業再開を果たした。再開後の店舗は被災前と同様の2階建てで、訓練では2階大広間と1階の2部屋にそれぞれ10人前後の客が入っている状態で実施した。

より実践的な避難訓練に、掛けて、誘導を開始した。1階個室は客7人の設定で女性1人が車いす利用者。移動したい「酔っ払って騒ぐ」「会計はこうしたらいいか尋ねる」などの役割が店側に伏せる形で与えられ、それぞれ迫真の演技で持ってきた椅子の女性に頭に乗せた。従業員は車椅子に座った女性に「大丈夫ですよ」と何度も声をかけた。避難の際、客役の1人が「車の鍵をなくした」と訴え、従業員は「車では電柱に。参加者は一斉にテーブルの下に潜り込んだ。津波警報が発令されると、参加者は役割に従って「早く逃げよう」とわめき立てるなどしたが、従業員は「当店はそのまま閉店致します。避難はお客さまのご協力が大事です」と呼び

# 客に役割設定 従業員の対応確認

# 訓練の繰り返し重要

厨房に戻って袋に入った氷を持ってきた。従業員は「やけどの人が出ましたー」と大きな声を上げ、店内で情報共有を図った。店の出入り口から店の外に客役が逃げ始めると、従業員は、店から約500坪のパンクティイのしるまき街なか創生協議会「幹事長の尾形和昭さん(58)は「今回の訓練で瀧川側は公民館まで客を誘導したが、どこに、どこまで案内するかは議論の余地がある。訓練と振り返りを繰り返すことが大事だ」と指摘した。

緊急地震速報が鳴り響くと訓練参加者はテーブルに潜った。車いす利用者の頭には従業員が座布団を乗せる機転を利かせた。



## 機転



## 協力

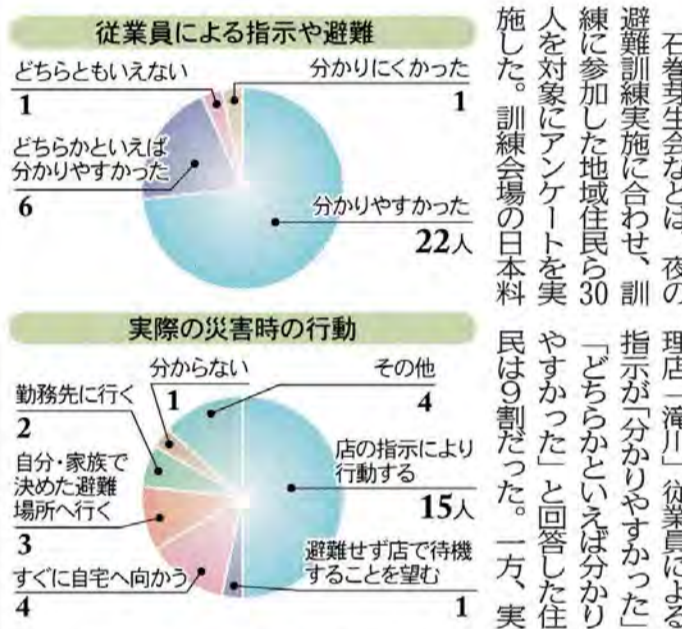
段差に気を付けながら車いす利用者役の参加者を誘導する従業員ら。要支援者の避難には従業員だけでなく周囲の協力も不可欠



## 介助

石巻中央公民館までの移動中、負傷者を演じる訓練参加者に付き添って避難を急ぐ従業員。訓練では随所に丁寧な対応が見られた

## 参加住民アンケート



# 店側の指示 9割「的確」

石巻芽生会などは、夜の理店「瀧川」従業員による避難訓練実施に合わせ、訓練に参加した地域住民ら30人を対象にアンケートを実施した。訓練会場の日本料理店「瀧川」従業員による「店側の指示は9割「的確」と回答した。一方、実際の災害時の行動については、「店の指示により行動する」は15人とどまり、「自宅へ向かう」は1

# 「従う」は5割どまり

分・家族で決めた避難場所へ行く」といった回答が続いた。自由記述欄では、訓練が停電を想定した暗闇の中で行われたことなどから「階段や段差」を危ぶむ声が多く、障子物や「ガラス戸」を心配する声もあった。従業員の対応では、大きな声で丁寧に避難誘導したことを良い点に挙げた回答が多かった一方で、「丁寧な対応はいいが時間がかかり不安だ」「従業員が地震や津波の情報共有を図るべきだ」などの改善を求める声もあった。

# 豪雨による土砂災害 地域の危険知り備え

## 森口 周二さん

東北大災害科学国際研究所准教授

豪雨災害で死者や負傷者が出るのは、降雨に伴って発生する土砂災害や河川氾濫が主な原因である。今年7月上旬に起きた西日本豪雨でも、降雨によって徐々にリスクが増加し、土砂災害や河川氾濫が各地で発生して「一気に死者・行方不明者数が増加した。安全な場所には避難するのには遅く、そうなる前に状況を把握し、避難しなければならぬ。現代の日本では、気象庁の警報・注意報、市町村の避難準備情報、その他の関連する防災情報が高度に発展している。情報の精度、密度、信頼性は、間違いなく世界でも最高水準のレベルにある。

これまでの豪雨災害を振り返ってみても、細かく見れば課題が残る部分はあがるが、事前の防災情報は実際の被害に対して適切な場合が多く、命を守るための情報として極めて重要と判断できる。大きな被害が生じると、防災情報を発信するタイミングが悪いなどの議論が展開されるが、一部の不運なケースを取り上げて議論していることが少なくない。まずは多くの妥当な防災情報が出されていることに、もっと目を向けるべきであろう。

ただ、高度に発達した現代の防災技術を持つとしても、個別の土砂災害を完全に予測するのは難しいと言わざるを得ない。ある広域の単位でリスクが高まっているという判断は可能だが、いつ、どこで斜面災害が発生するのかをピンポイントで予想するのは非常に難しい。

わが国の防災技術を信頼しながらも、その限界を理解して情報と対峙する必要がある。一気に多量の雨が降れば、土砂災害の発生は免れない。せめて災害による死者が出ない社会をつくり出し、災害と共生しなければならぬ。

災害による生死の分かれ道には、必ず個人の判断が存在する。自分の命、家族の命、さらには地域住民の命を自分たちで守るという覚悟を持って、日頃の準備をする必要がある。専門家が有するような高度な知識は必要ない。ハザードマップを確認し、自分が住んでいる周りでどのような災害が発生する可能性があるのかを知っておくことが重要だ。発生した際にどのような行動をとるのか、そのために事前に何をすべきなのかと考えることが、実践的な防災につながる。

## 探る



もりうち しゅうじ 岐阜大工学部卒、同大学院工学研究科博士後期課程修了。東京工業大学工学研究所特別研究員、米スタンフォード大学訪問研究員、岐阜大助教を経て13年から現職。専門は地盤工学・計算工学。福井県出身。40歳。

## 地域と連携 年に11回訓練

宮城県亘理町長 瀧小主幹 渡部 康直さん(54)



長瀬小では年11回、学校安全に関わる訓練をしています。本年度、力を入れているのは地域との連携です。5月に実施した全校生徒が約3千名のコースを歩く徒歩避難訓練では、地域に配る学校安全だよりなどで住民参加を呼び掛けました。当日、住民7人が参加し、下級生と上級生のペアが懸命に歩く姿を見守っていただきました。後日、感想をくださった方もおり、コースにどんな危険があるのか一緒に考える機会にもなりました。災害時、近隣で助け合う「共助」の考え方を広めるため、今後も地域と連携した活動を続けたいと思います。

## 親子で最良の避難路発見

一関市中里まちづくり協議会会長 辻山 慶治さん(70)



水害に悩まされてきた一関市中里地区では、三つの自主防災クラブが独自に防災訓練を行ってきましたが、岩手・宮城内陸地震と東日本大震災の経験から、活動の一つにまとめました。市民センターに逃げる子どもたちの避難訓練は、出発点を学校から各家庭に変

## 現場から